〈解答〉

1　1　イ

2　(1)　A　豊穣をもたらしてくれるもの　　B　人間のすべて

(2)　[例]今後の人生で役に立つ

3　うつむけて

配点　各2点　10点満点

〈解説〉

1

1　「文学とも、ましてや国の発展とも関係のない毎日で……」という掠れて途切れた「私」の言葉に気づいた先生は、あえてその言葉に気づかなかったかのように微笑みながら、「私も国のためになるようなことはしたことがないな」と言ったのである。先生がそのように言ったのは、「私」が周囲の友人たちと違い、これから国の発展とは関係のない人生を歩んでいくことに劣等感や羞恥心を抱いていることに気がつき、自身も同じであると伝えることで、励まそうとしたからである。

2　(1)　文学について先生は、餡をこねること自体には必要ないものかもしれないが、「餡をこねる貴女自身には、必要という言葉では足らないほどの豊穣をもたらしてくれるもの」だと述べている。それは、「愛と憎しみ」「策謀と和解」「裏切りと赦し」などのありとあらゆる、「人間のすべて」が文学にはあるからである。

(2)　うつむいていた「私」に先生が声をかけていると、いつしか先生を取り囲むようにして学生たちが集まって、先生から迸(ほとばし)る文学への愛情に耳を傾けている。先生は、「私」たちに「文学にはすべてがあるため、どのような人生や仕事を選んだとしても、『文学を通じて学んだことは生きる上で役に立つということ』を心に留めておかなければいけない」と伝えたのである。

3　大学の卒業式の日、「私」は「うつむきがち」であった。それは、友人たちが喜びや不安を胸に抱きながら社会に漕ぎ出していくのに対し、自分だけが取り残されるように感じていたからである。しかし、そんな「私」の様子に気がついた先生の励ましの言葉に、「私」は、「うつむけていた顔を上げ、思わず先生の姿を正面から見た」のである。